石川県金沢市今町A遺跡

—金沢バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告—

1982・3

石川県立埋蔵文化財センター

例　　言

一　金沢市今町Ａ遺跡の発掘調査は、建設省金沢工事事務所が行なった金沢バイパスの建設を原因として、昭和46年9月3日から同月30日にわたって実施された。

二　調査は次の組織をもって行われた（なお、職名は当時のものとした）。

調査主任　高堀　勝喜（石川考古学研究会代表幹事）
調 査 員　橋本　澄夫（県教委文化室文化財係長）
谷内尾晋司（石川考古学研究会々員）
高瀬　　澄（県教委文化室主事）
中島　俊一（　〃　〃　職員）
高橋　　裕（　〃　〃　〃）
幹　　事　河崎与志雄（　〃　〃　主事）

三　本報告書に関する遺物整理は、石川県立埋蔵文化財センターが五ヶ年計画で行った昭和55年度遺物整理事業の一部として、石川県埋蔵文化財協会に委託して実施した。遺物整理(実測～トレース)に当ったのは、同協会の樫見敦子・森岡かがり・斉藤和代・上田亮子氏である。

四　本報告書の刊行費は、石川県立埋蔵文化財センターが行なう昭和56年度報告書刊行業（五ヶ年計画）によった。

五　本書の執筆は橋本澄夫（県立埋文センター次長）が行ったが、土器の観察等については、平田天秋氏（同係長）の支援を受け、遺物の撮影は戸澗幹夫・垣田修児氏（同主事）によった。なお、執筆に当ってはセンター職員の協力を得るところが多かった。

目　　次

一　遺跡の位置と環境……1
二　発見と調査に至った経緯……3
三　調査法と検出遺構の概要……4
四　出　土　遺　物……6
五　出土土器の年代について……21
六　ま　と　め……23

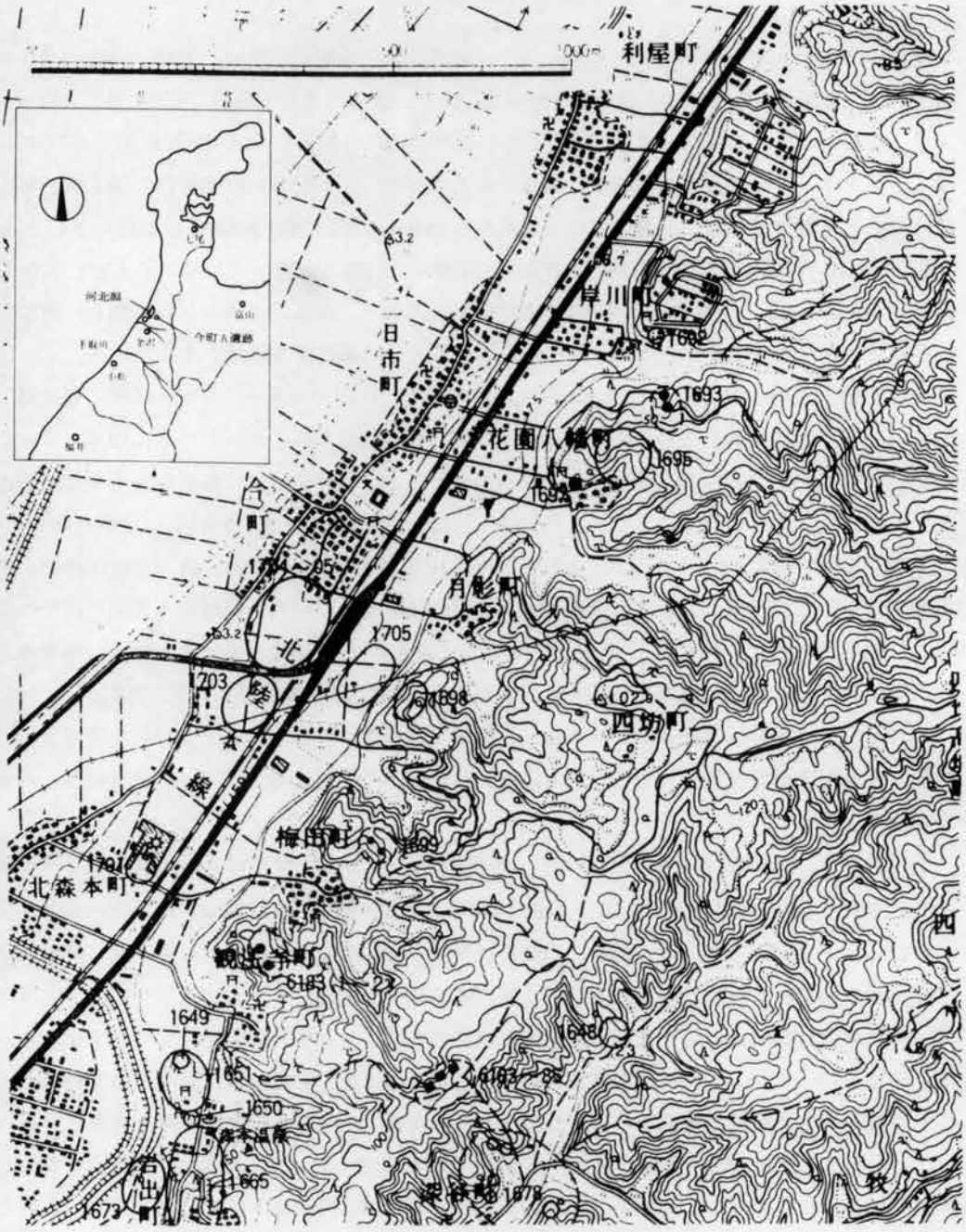
一　遺跡の位置と歴史的環境

金沢市今町は、市街地の北東方郊外にあり、砺波丘陵の西麓部に近い。遺跡は山裾の地形転換線から西（海側）へ約300mの緩やかな傾斜地にあり、調査地から北西約3kmで旧河北潟畔に達する。したがって、当遺跡は丘陵部を背にし、潟畔の低地に臨んだ微高地（標高約3.5m）に立地するといえよう。砺波丘陵西麓線は、南西から北東方向へ、すなわち内灘付近の海岸線・砂丘とほぼ併行して延びている。丘麓部には小規模な谷が連なるが、比較的単調な丘麓線をなしている。今町A遺跡背後の丘陵は、南西方で森本川、北東方で津幡川によって区切られるが、その間の延長約7kmである。旧森本地区の原始・古代遺跡の過半は、森本川に臨んだ谷口部と、砺波丘陵西麓付近一帯に集在するとともに、金沢市における一つの遺跡密集地域をなしている。

金沢市編入以前（明治22年～昭和29年）の今町は、月影・八幡・二日市・岸川・利屋町とともに河北郡花園村に属していた。村名は村内一帯に花卉栽培が盛んだったことに由来している。中世においては、今町の北に隣接する二日市の名がみえ、北陸道沿いに賑わいをみせた定期市が開かれていたと考えられる。また、古代にあっては、「和名抄」にあらわれる加賀郡八郷の一つ、井家郷（為乃以倍・いのいえ）に含まれるとみられる。井家郷の郷域は、金沢市の北部から津幡町南部にかけての地域で、砺波丘陵西麓と河北潟にはさまれた細長い範囲だと想定されている。のち、在地領主として井家（上）氏の名が現われ、寿永2年（1183）、平氏軍と戦った木曽義仲と北国軍団の中にも井上次郎師方（範方）の名がみえている（「平家物語」「源平盛衰記」）。ただ、「和名抄」には同じ加賀郡八郷の一つに、芹田郷（世利太）の名があり、これを金腐川右岸の平野部（金沢市千田町付近）に当てる説もある。しかし、今町周辺については、井家郷内とみるのが穏当だと考えている。

前述の通り、今町周辺は遺跡分布の濃い地域である。しかし、そのほとんどは砺波丘陵西麓部で発見されており、河北潟畔に至るその幅3kmにおよぶ沖積地には、周知されている遺跡は極めて少ない。大場町東方水田（一部県立向陽高校々地）に拡がる大場遺跡（古墳中期・室町前半）と才田町北端にある円墳とみられるもの1基（才田御亭山古墳）をみるに過ぎない。河北潟南東畔沖積地の遺跡分布は、いうまでもなく過去の潟面の拡がりと密接な関係をもつ。すなわち、潟の南東汀線の位置が、どれほど内陸部に寄っていたかによる。歴史時代以降についての試案として、津幡町川尻・潟端・金沢市才田・八田・木越・大場・大浦の各町を結ぶ線を考えている。これは、ほぼ標高2mを結ぶラインともいえる。歴史時代以降といっても時期によって、かなりの変動は認めねばならないが、現潟岸より少なくとも1、2kmは内陸寄りに潟汀線を求めてよいと想定している。したがって、この想定線より内側については、遺跡立地可能な範囲であり、将来かなりの遺跡が発見される可能性もあるとみている。現時点で遺跡分布が著しく少いのは、綿密な確認調査を行っていないことと、大場遺跡での発掘結果からみて、遺構面や遺物包含層が深く埋没していることによるとみている。

丘麓線沿いで発見されている遺跡も、厳密にいうならば、地形転換線より山側に立地する古墳・



第1図　今町A遺跡（1703）付近の地形図

横穴群と、転換線より低地にかけての緩い傾斜地上で発見されている集落遺跡などに大別することができる。丘陵・台地性地形における遺跡分布は、森本川に臨む谷口部付近に顕在する。塚崎集落遺跡（弥生末～古墳初期）、吉原七ッ塚・同大門山墳墓群（同）、塚崎横穴群（古墳後期）など、北陸自動車道建設事業を原因に明らかにされた遺跡群はとくに著名であるが、他に岩出うわの集落遺跡（縄文中期・古墳初期・平安）や岩出・観法寺横穴群が所在し、その一部はすでに調査されている。また、この谷口部の両側山頂部を中心に、御屋敷城跡（高尾城跡）・堅田城跡の中世二城跡が対峙するように築かれている。今町の東方丘陵では、二日市・花園薬師・梅田町地内に、数基程度を単位とする小横穴群の存在が確認されている。

一方、山麓沿いの傾斜地上では、吉原親王塚・同法華堂古墳群など盛土古墳があり、また各期の集落跡も分布している。中でも今町A遺跡の東約800 mの山裾にある月影遺跡は、北陸地方における土師器第Ⅰ様式である月影式土器の標式遺跡として重要である。ただ、奈良・平安時代に属する遺跡は意外に少く、今町A遺跡のほかに塚崎たかき遺跡・岩出うつぼ遺跡と今町A遺跡の北側に近接して拡がる今町御所野遺跡・今町僧の町遺跡で須恵器などが採集されているに過ぎない。

二　発見と調査に至った経緯

今町地内で最初に発見された遺跡は、本遺跡の北約200 mを距てて拡がる今町僧の町遺跡で、奈良・平安時代に属する須恵器（坏・長頸瓶・甕など）が採集されている（市立花園小学校保管）。今町A遺跡は、松田正男・吉本澄与治氏（いずれも金沢市職員）による分布調査で発見されたものである。前述のように僧の町遺跡とは200 m程度の距離を置いているが、実際には一連の集落跡となる可能性もあるとみている。

本遺跡で緊急発掘を行うに至った原因は、金沢バイパス（現国道8号線）の建設によるものであった。今町地内では、金沢市街から森本を経由し能登や富山方面へ通ずる国道（旧8号線）が敷設されていたが、市街地の交通渋滞を緩和するため、海岸寄りを迂回するバイパスが建設されることになったのである。そして、同バイパスの北東端で、旧8号線と接続する地点が、今町地内であり、当遺跡はその接続地点を中心に拡がりをもっていたのである。

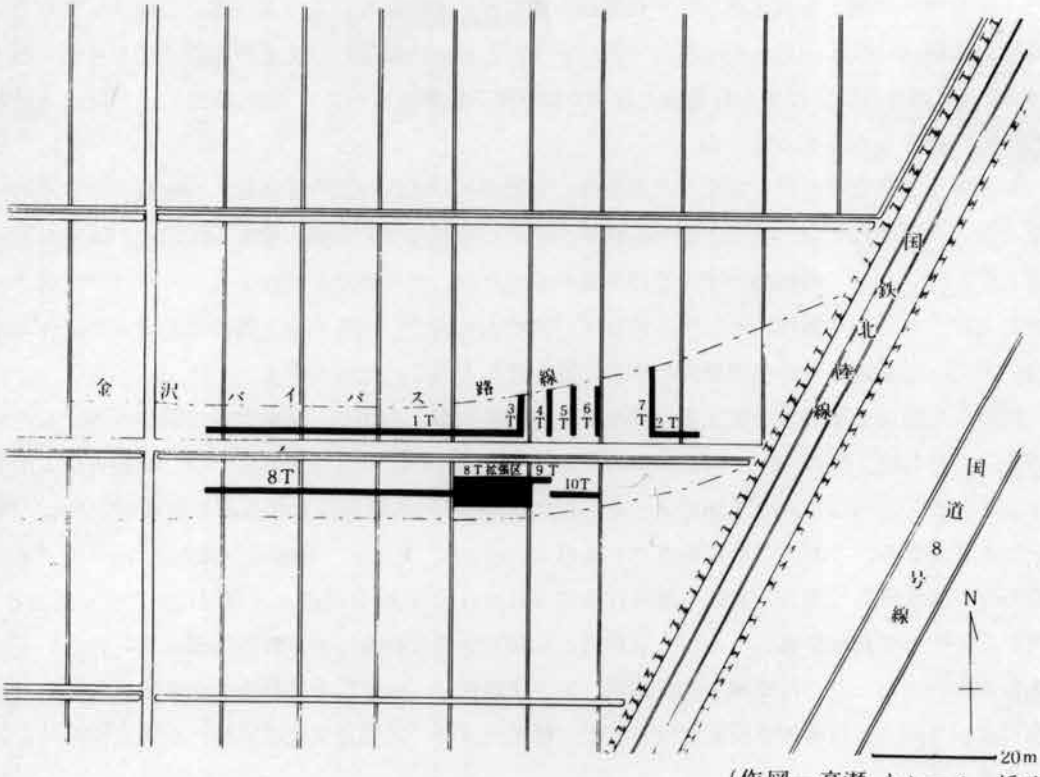
建設省北陸地方建設局金沢工事々務所長と石川県知事との間で、発掘調査に関する委託契約が締結されたのは、昭和46年8月28日のことであり、この際に原因者負担として建設省が支出することになったのは1,079千円であった。これは、バイパス路線敷に含まれる包蔵地500 m^2の発掘調査費である。なお、これに先きだち8月25日付で、文化庁へ発掘届が提出されている（発掘担当者　橋本澄夫）。現地における調査は9月3日から同月30日の約1ヵ月間にわたって行われ、調査主任として高堀勝喜氏（当時　石川考古学研究会代表幹事）が全般の指導に当られた。現場担当者の任に当ったのは高瀬　澄・高橋　裕・中島俊一（いずれも県教委文化室職員）と谷内尾晋司氏（当時　石川考古学研究会々員）で、橋本（当時　文化室文化財係長）が適宜指導助言に当っている。

三　調査法と検出遺構の概要

市内藤江・田中町方面を経て延びてきた金沢バイパスは、今町集落の南側で旧七尾街道と交差し、さらに国鉄北陸本線・七尾線を陸橋で越えて、国鉄線路を併行隣接する旧国道８号線に接続する。土器片類の散布は、北陸本線西側のバイパス路線内でも認められたが、この中心部分は陸橋建設部分に当っていた。当時、この辺り一帯は花卉栽培の畑地となっていたが、調査必要地区すなわちバイパス予定路線敷内には、ほぼ路線敷の中央部に併行して、幅約2.5ｍの農道が敷設されていた。発掘調査はトレンチ法によって行ったが、トレンチは基本的には、この農道の両側に平行もしくは直交するように設定している。なお、農道はほぼ南北方向に一致している。

発掘調査は、まず遺跡範囲の確認と包含層および遺構遺存状態の掌握に重点をおいて着手。そのためのトレンチとして、農道北側に並行して１Ｔ（１×50ｍ）と２Ｔ（１×８ｍ）を設定。これに直交して３Ｔ（１×６ｍ）および４・５・６Ｔ（いずれも１×８ｍ）と７Ｔ（１×11ｍ）の計７本のトレンチを設けた。また、農道南側では、並行する８Ｔ（１×52ｍ）と10Ｔ（１×８ｍ）を設定している。

上記のトレンチによる発掘所見では、農道部分を境にして、その南北でかなりの差異のあることを確認している。すなわち、農道北側で設定した各トレンチでは、耕土中に若干の土器小片混



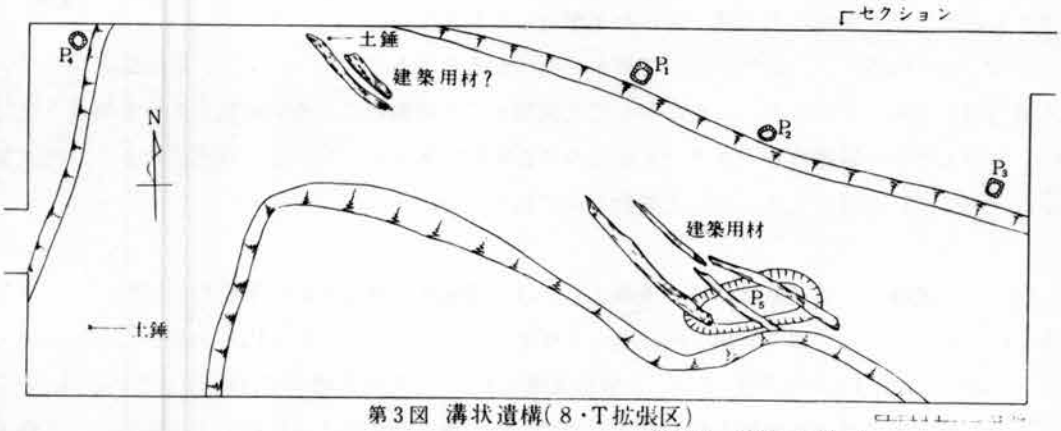
（作図―高瀬　トレース―橋本）

第２図　トレンチの配置

在を認め得たに過ぎず、包含層や遺構など生活面とみられる徴候を検出することができなかった。このことから、本遺跡の範囲がこの部分（農道北側）にまで延びていないか、集落跡内の遺構空白地に達したものと判断させた。なお、地山とみられる黄色粘土層は、ほぼ平坦に全面で認められたが、耕作などで遺構面が削られた可能性はないと考えている。

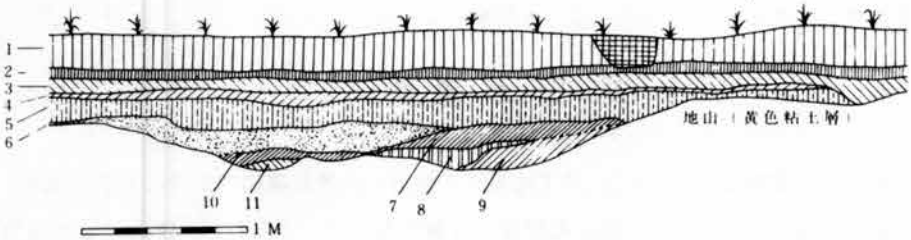
一方、農道南側で設定した8Tでは、その東寄りの部分で遺物類の包含が多いことを確認するとともに、溝状とみられる遺構を検出している。このことから、バイパス路線敷内における遺構群の分布は、その南側に偏在することが判明した。すなわち、発掘予定地区には、遺構群の北端部分がかろうじて重複していたことになる。T8拡張発掘区（65 m²）と9T（1×3m）は、8Tで検出した溝状遺構を追求する目的で設定された。

溝状遺構　第3図で示したように幅3～3.5m、深さ約40cmを測る不整形なプランを示す溝状遺構である。溝は拡張区の南東隅から北西隅に向って延びるが、北西部に寄って南西方向に向けて、ほぼ直角に屈曲していることを確認した。しかし、拡張区の北側は農道（供用中）に接



第3図　溝状遺構（8・T拡張区）

（実測―高橋・中島　トレース―橋本）



（実測―高瀬・高橋・中島　トレース―橋本）

1．耕　　土
2．灰褐色砂質土層
3．黄褐色砂質土層
4．黒色粘土質土層
5．黄褐色砂質土層（遺物包含）
6．黒灰色粘土質土層（　〃　）
7．淡黄褐色砂質土層
8．微砂粒層（川砂）
9．淡黄褐色砂質土層
10．黒灰色砂層
11．微砂粒層（川砂）

第4図　溝状遺構土層断面図

しており、発掘の対象外とせざるを得なかったため確認するに至らなかった。このことは、この溝状遺構がL字形に屈曲するのではなく、この部分で分岐してT字形となる可能性を残したことになる。ただし、農道北側で設けた1Tでは、延長とみられる溝の痕跡を認めなかったから、T字形に分岐して北に延びるとしても、同トレンチに達しない程度の短いものと想定せねばならない。

発掘対象面積が狭いから、検出した遺構も小部分に過ぎず、その全体像を想定することは困難である。一般的にいえば、溝状遺構の性格として、用排水路・環濠などの人工的な溝と、河川など自然的原因による溝が考えられる。第4図は溝状遺構北壁でのセクション図であるが、8～11層など溝底部に堆積する土壌が、いずれも砂礫を多く含んだ土層からなっており、溝状遺構が機能していた当時において、流水が通じていたことを示していた。しかし、この事実だけでは、人工溝か自然河川かの別を判断する根拠にはなり得ず、直ちに断定することは適当でない。ただ、溝状遺構がほぼ直角に屈曲している点は、人工的な溝であったことを裏付けるものと考えている。また、この溝を境として北側に良好な包含層や遺構を残していないことは、本遺跡の北を限る線ともほぼ一致することとなり、この集落跡の中で重要な意味をもつ遺構とみるべきかも知れない。上縁での幅約3～3.5mを測る、かなりの規模の溝であるから、集落もしくは集落内のある単位を画する役割りをも兼ねた人工溝であったと想定しておきたい。

なお、流水の方向は、地形からみて東から西へとみるべきであろう。また、溝底部からかなりの遺物類を採集しているが、これに対して上流部からの流搬物である可能性もあると指摘されたが、堆積土層中の砂礫粒の大きさなどからみて否定的であった。ただし、自然遺物とくに流木などの一部については、上流からの流搬物とみておきたい。

ピット状遺構　溝状遺構以外の遺構としては、溝底部で検出された不整形の円形ピット状遺構（P_5）と、主として溝の北側上縁に沿って検出された小ピット（P_1～P_4）があった。P_5は、長さ2.2m、幅1mほどの楕円形プラン土壙状遺構であるが、その性格までは明らかでない。P_1～P_4は、いずれも掘立柱の柱穴跡を想わせるもので、P_4が南北溝の西上縁に接してある外は、東西溝北側上縁に沿って検出された。しかし、穴径・深さが小さく、その配列も直線上に並ばないことなどから、建造物の主たる柱穴とはならないと判断している。

四　出土遺物

本遺跡から出土した遺物はほとんどは、8T拡張区で検出した溝状遺構内からのものである。包含していた土層は、主として第3図で示した第5・6層であった。すなわち、溝底直上に堆積していた含砂礫質土層の上に、主たる包含層が存在したことになる。

出土遺物は、須恵器・土師器・土錘・貨幣・曲物製容器・建築用材残欠？などで、自然遺物として若干の果実種（モモ？）が採集されている。

1）　**貨　幣**　中国製貨幣2点が出土している。いずれも耕土直下の床土と遺物包含層の

間に挟まれた粘質の黒色土層中から検出されたものである。2点のうち、貨幣種の読みとれるものは「熙寧元宝」1点で、他の1点は磨耗が著しく、判読不能である（第13図　拓影）。「熙寧元宝」は、西暦1064年初鋳で以後1077年までの14年間にわたって流通した北宋銭であり、かって本遺跡の上層に、11世紀以降おそらく中世に降る遺構が重複していたことを物語っている。

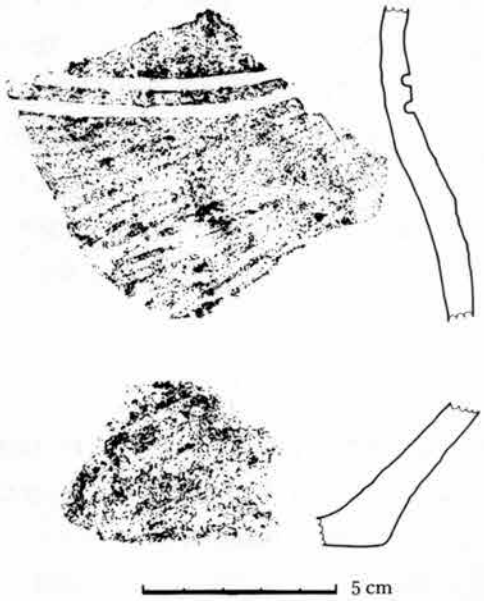
2）**曲物製容器**　檜材を用いたとみられる曲物である。口径13cm、深さ5.5cmの小振りの容器であるが、遺存の状態は極めて悪く、取り上げの際に不手際があり、採取と同じに崩壊し原形を保つことができなかった。したがって、当遺物についての細部については、観察がゆき届かなかった。おそらく柄がとり付けられた杓であったと想定している。なお、底板を上にした状態で出土している（写真図版参照）。

3）**建築用材**　溝状遺構内の土器包含層と同じ土層中から、6本の棒状をなす木質遺物が検出された。最も長いもので約3mを測ったが、小さな破片となっているものはかなりの数におよんでいる。木質遺物とくにその表面は、著しく腐朽しており、樹皮部あるいは削痕などの状態を観察することは困難であった。しかし、中には明らかに板材とみられるものも含まれており、ここでは建築用材とみておきたい。なお、比較的大振りだった6本の遺物は、おおむね溝状遺構の方向と長軸線が一致する状態で出土している。

4）**土　器**

A　縄文土器

本遺跡から2点の縄文土器片が出土している。条痕を施した粗製の深鉢形土器胴部片と底部片で、前者の内外面には、厚い炭化物（スス）の付着がみられる。いずれも、晩期後半に比定できるものとみている。



第5図　今町A遺跡出土の縄文土器片

B　須　恵　器

I）蓋

出土総数は97点であったが、うち図示可能なもの14点について、その特徴等につき説明しておく。坏受けの返しを有するもの4点、うち口縁先端が嘴（くちばし）状に屈曲するタイプ93点がある。なお、後者はつまみの形状により2類に分類した。

(1)　坏受けの返しを有する蓋

図示していないが、口径14cm前後を

測り、この類としては大型品に属そう。いずれも全形を知り得ないが、2～4cmの嘴状をなす返しが内屈するものと、やや外反するものとの2種がみられる。いずれも調整はナデによっている。

(2) 扁平な宝珠形のつまみを有する蓋（第6図～5）

図1は、口径16.4cm、器高3.6cm、つまみ径3.2cm、同高さ1.2cmを測り、口縁の端部はやや内屈させて丸くおさめている。中央のつまみ貼付部から肩部にかけては、ヘラ削りの後でナデ調整が加えられ、他は内外面ともにナデ調整としている。胎土・焼成ともに良好で、青灰色を呈する。図3は、口径15.5cm、器高3.5cm、つまみ径2.7cm、同高さ0.7cm。図4は、口径17.6cm、器高3.8cm、つまみ径3.3cm、同高さ1.0cm。図5は、口径14.5cm以上、器高3.1cm、つまみ径3.2cm、同高さ0.9cmを測り、いずれも図1とほぼ同巧のものとみられるが、つまみ貼付部分から肩部にかけての調整技法において、やや差異を認めることができる。すなわち、図3は非常に丁寧なヘラ削りとし、図4は通有程度の削り、図5では、粗いヘラ削りの後に、ナデ調整と平行方向に擦痕が観察できる。図3は、胎土・焼成ともに良く、また内外面のナデ調整も平滑で、全体に入念な造作といえる。図4の内面には、ヘラ先による刻文が施されている。いずれも、砂粒の移動痕観察によれば、時計廻りによるロクロ成形によったとみられる。図2はやや器高も高く、肩部も丸味をもつものである。因みに、口径17.0cm、器高4.3cm、つまみ径3.6cm、同高さ1.0cmを測り、つまみの貼付部分から肩部にかけて、明瞭なヘラ削り痕をとどめる。なお、他の蓋に比べて、胎土や調整法にやや粗雑な印象を与えるものである。

(3) 扁平でボタン状のつまみを有する蓋（第6図6～14）

図6は、口径16.6cm、器高1.5cm、つまみ径3.5cm、同高さ0.4cmを測る。焼きひずみもあるが、極めて扁平なものである。つまみ貼付部分から肩部のかなり下方まで、丹念なヘラ削りを施している。口縁の端部は外屈し、ナデによる凹部をなすが、内面においては明瞭でない。その他の同類蓋も、同様に器高の低い扁平なものが多い。図7は2.7cm、図8は3.4cm、図11は4.3cmを測るが、これは例外的なものといえる。図7には、肩部（天井部）を荒くヘラ削りしたあと、ヘラ先によって刻文「X」を施している。図9の内面には、墨痕もしくは塗漆痕が認められ、坏蓋硯として使用されたことも考えられる。図10・12は、ともに天井部に丁寧なヘラ削りが施され、他部のナデ調整も入念で、胎土・焼成も良好な優品である。

II）無高台坏

出土総数は116点であった。うち、口径を復元できるものについてみると、9～11cmのもの4点（A類）、11～12cmのもの4点（B類）、12～13cmのもの16点（C類）、13～14cmのもの8点（D類）、14cmを超えるもの4点（E類）に分類できる。以下、口径を基礎とした上記の分類に従って、その特徴の要点を説明しておく。

(1) A類（口径9～11cm）坏（第6図15）

図示したものは、図15の1点のみであるが、口径9.0 cm、同9.3 cmを測るものがある。前者は、底部ヘラ切りののちにナデ調整を施し、底部と体部との境にヘラ削りを行う外は、すべてナデ調整としている。後者（口径9.3 cm）は、底部でヘラ切りのままとし、その痕を螺旋状に残す。底部から体部にかけては、鋭く屈曲して立ち上がり、口縁端部は丸くおさめている。底部以外ではナデ調整としている。なお、前者には、重ね焼きの痕跡が認められるが、坏身を重ねたものである。

図15は、口径10.2 cm、器高3.6 cmを測る。底部には、逆時計廻りのヘラ切り痕を明瞭に残す。底部と体部境の腰部にはヘラ削を施し、内面で強く屈曲させて、やや外傾しながら口縁端部に至っている。内面はナデによって平坦に仕上げられている。口縁端部近い外面に、重ね焼きの痕跡をとどめている。

(2) B類（口径11～12 cm）坏（第7図25・27、第8図41、第9図48）

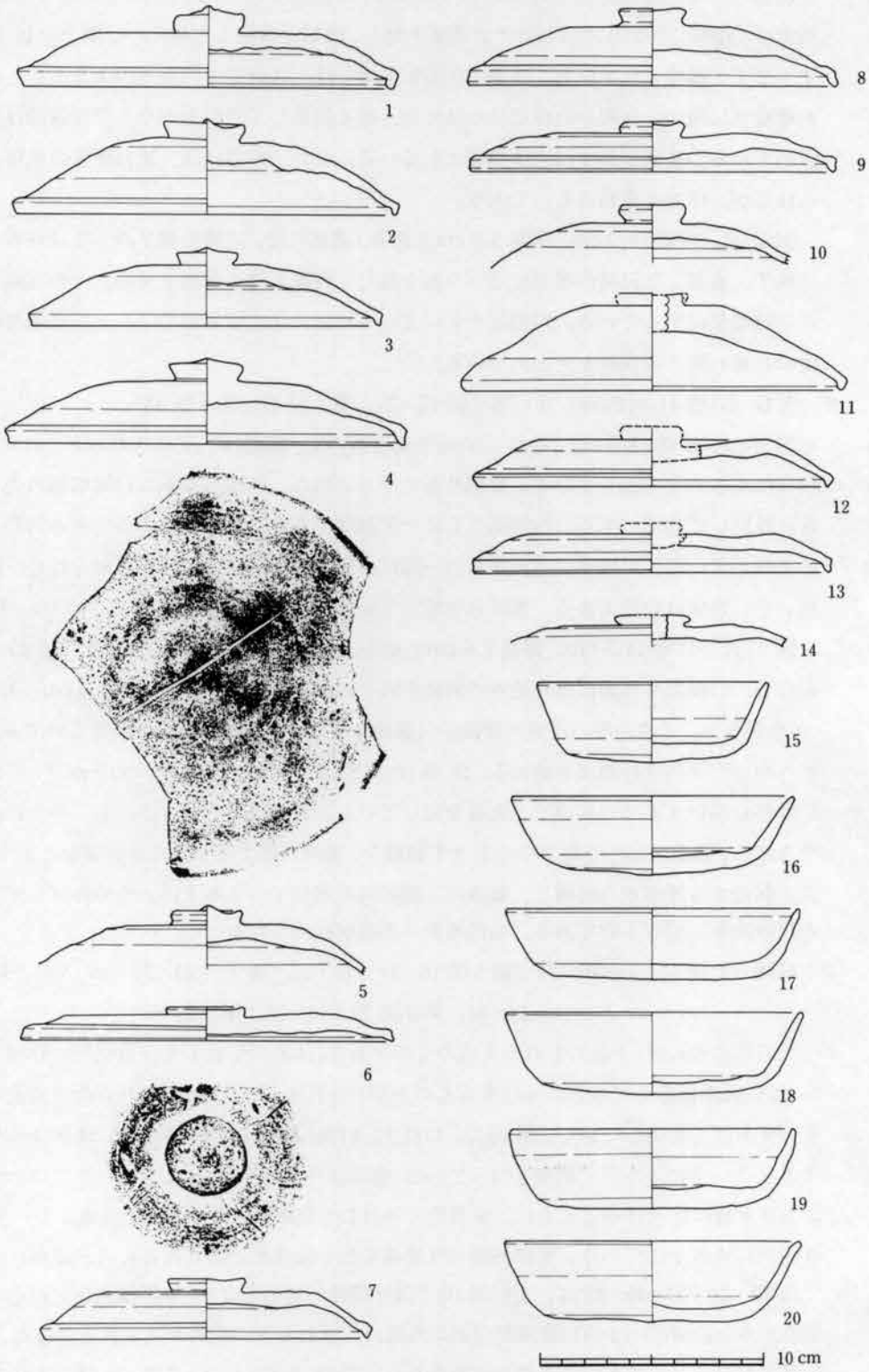
図25は、口径11.9 cm、器高3.6 cmを測るもので、底部はヘラ切りのあと、ハケ（刷毛）状具によるナデを施している。腰部外面でゆるく凹み、外傾しながら口縁端部の近くでさらに外反して端部に至る。内外面ともにナデ調整であるが、粘土紐の痕である凹凸をそのまま残している。口縁部に近い内面の一部に、墨痕（灯芯油痕？）が認められる。胎土は良いが、焼成はややあまく、青灰色を呈している。

図27は、口径11.8 cm、器高3.6 cmを測る。成形・調整などについては、図25とほぼ同巧で、口縁端部外面に重ね焼きの痕跡を残している。図41は、口径11.5 cm、器高3.0 cmを測るが、器肉の厚い平底の底部から屈曲外反して、先細り口縁に至るものである。体部外面にヘラ描きの刻文を認める。図48は、口径12.0 cm、器高4.2 cmを測り、坏形の中では最も深いタイプのもので、丸底を呈している。底部はヘラ切りののち、ハケによるナデを施し、腰部ではヘラ削りののちナデ調整を、他の各部ではすべてナデ調整としている。丸く屈曲する腰部から外傾し、器体の上部約⅓の部分でつまみ上げ、やや外反して先細りの口縁端部に至るものである。底部外面に墨書が認められる。

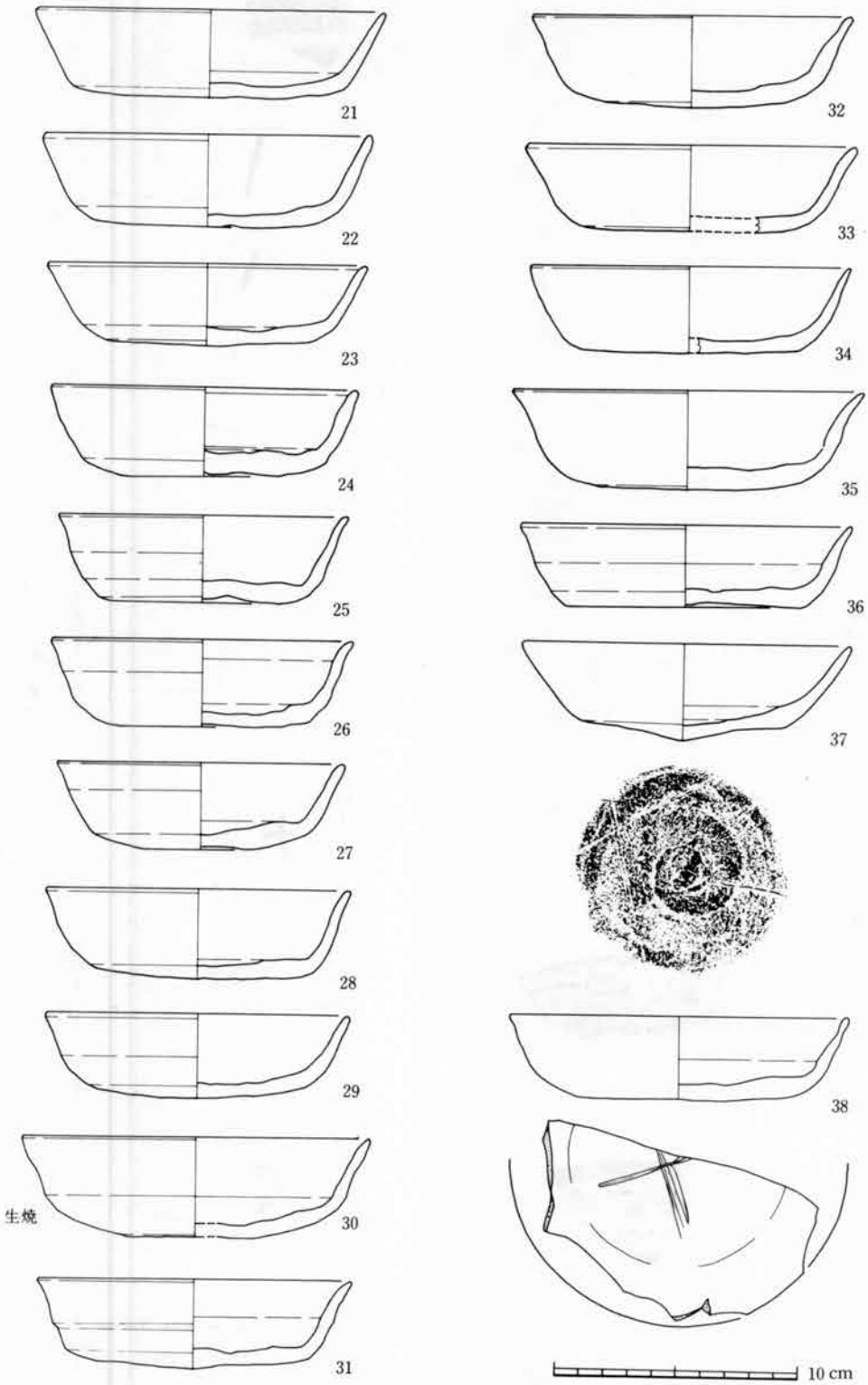
(3) C類（口径12～13 cm）坏（第6図16・17・19・20、第7図23・24・26・28・29・31・32・34、第8図39・40・46、第9図49）

この類の中には、平底のものと丸底のものがあり、体部の形状でも、直線的に外傾するものと、口縁端部近くでさらに外反するものとがみられる。ここでは、これらの代表的な事例をとりあげて説明しておく。図16は、口径12.4 cm、器高3.3 cmを測り、底部はヘラ切りのあと、ハケによるナデ調整を行っている。腰部はヘラ削りによって丸く、さらにナデ調整により平滑に仕上げるとともに、直線的に外傾して口縁に至る。胎土・焼成ともに良好で、青灰色に焼き上げている。底部外面には墨痕もしくは漆痕とみられるものが認められる。

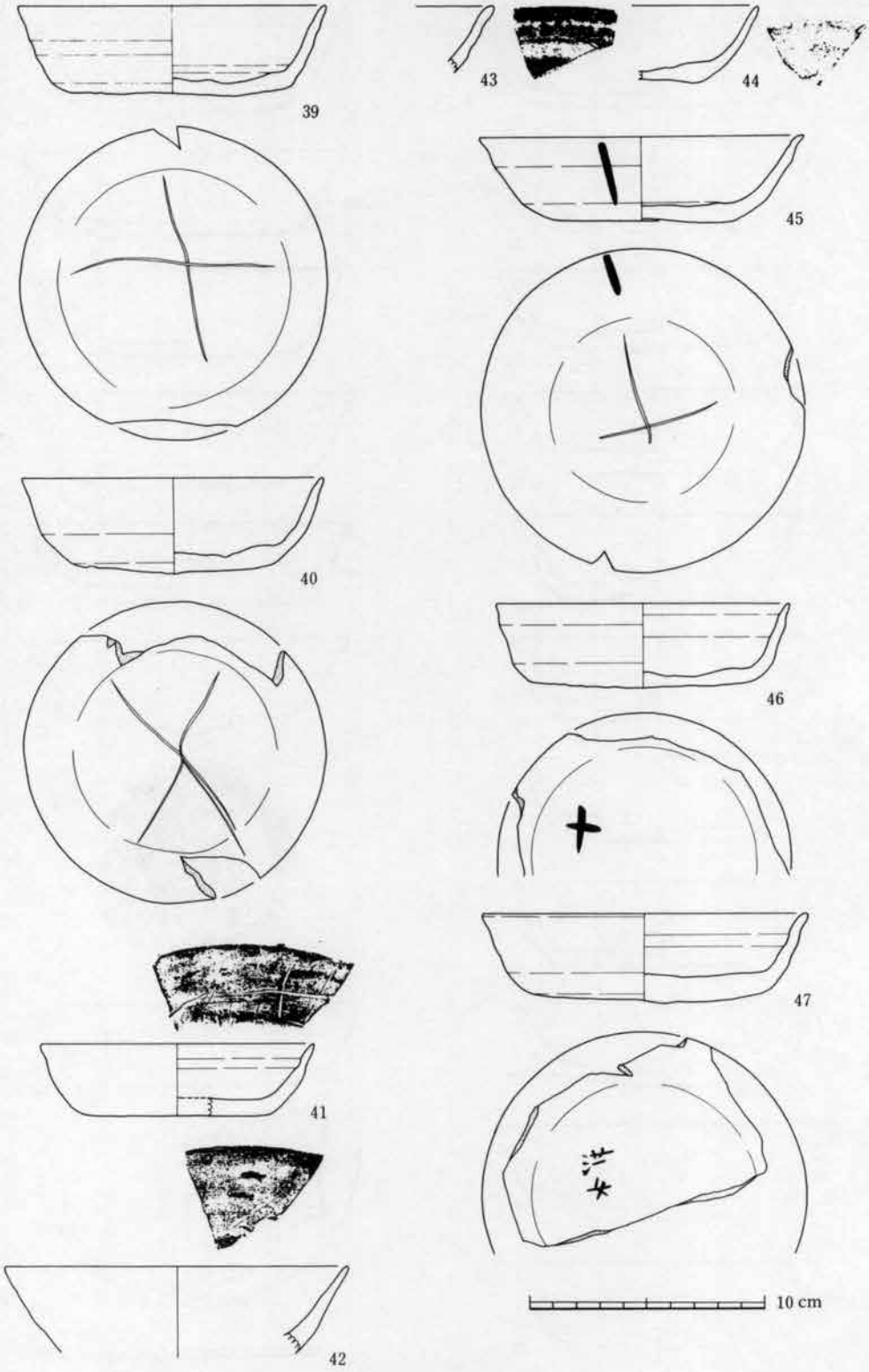
図23・24・39・46・49は、上記図16とほぼ同様の器形をなし、成形技法などの点でも類似点が多い。図23・24の口縁端部付近の外面に、重ね焼きの痕跡がみられる。また、図39の底部には、ヘラ描きによる刻文が施される。図49の底部には「真田」と読みとれる墨書があり、図46の底部にも墨書痕が認められる。



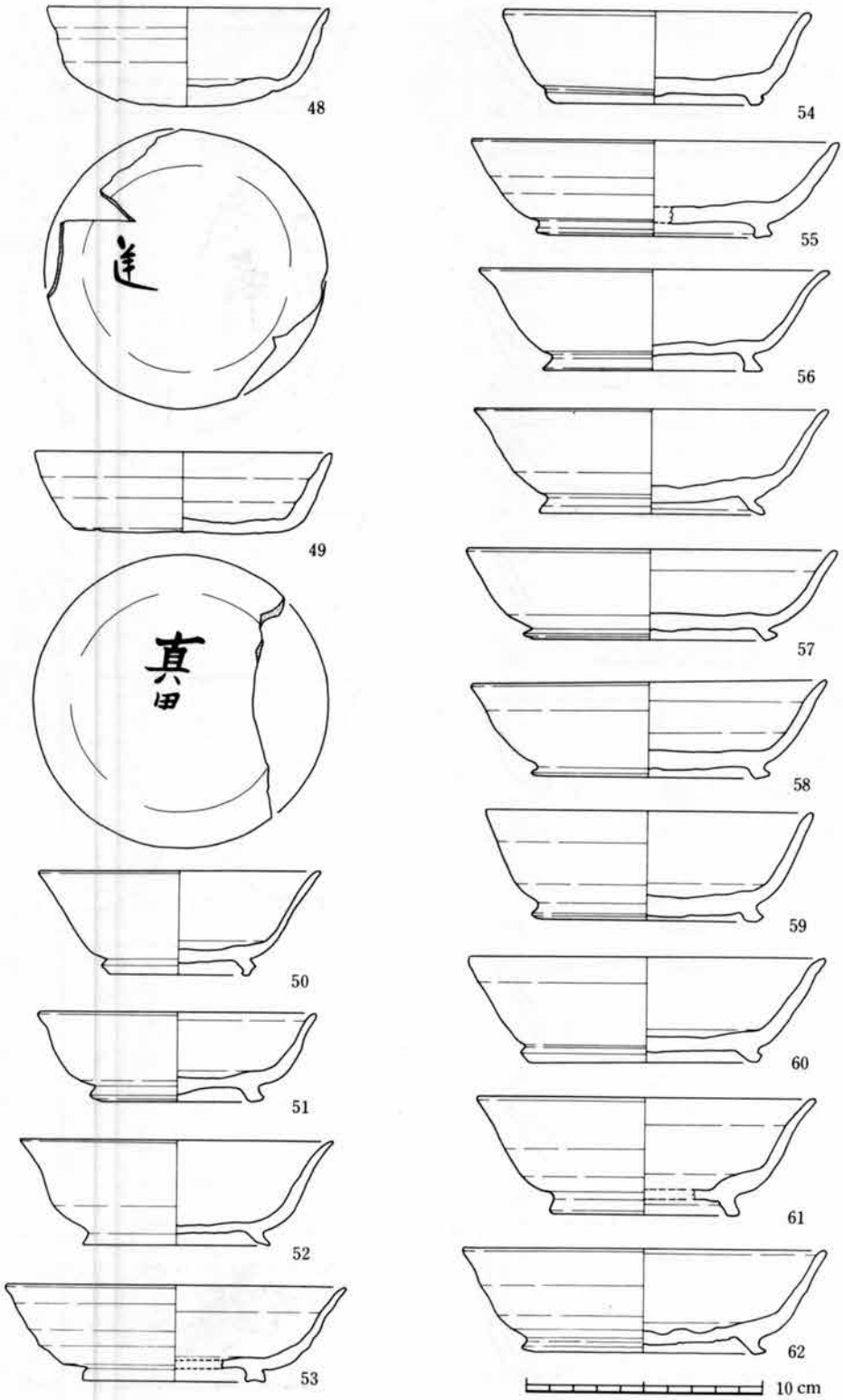
第6図　今町A遺跡出土須恵器（1）



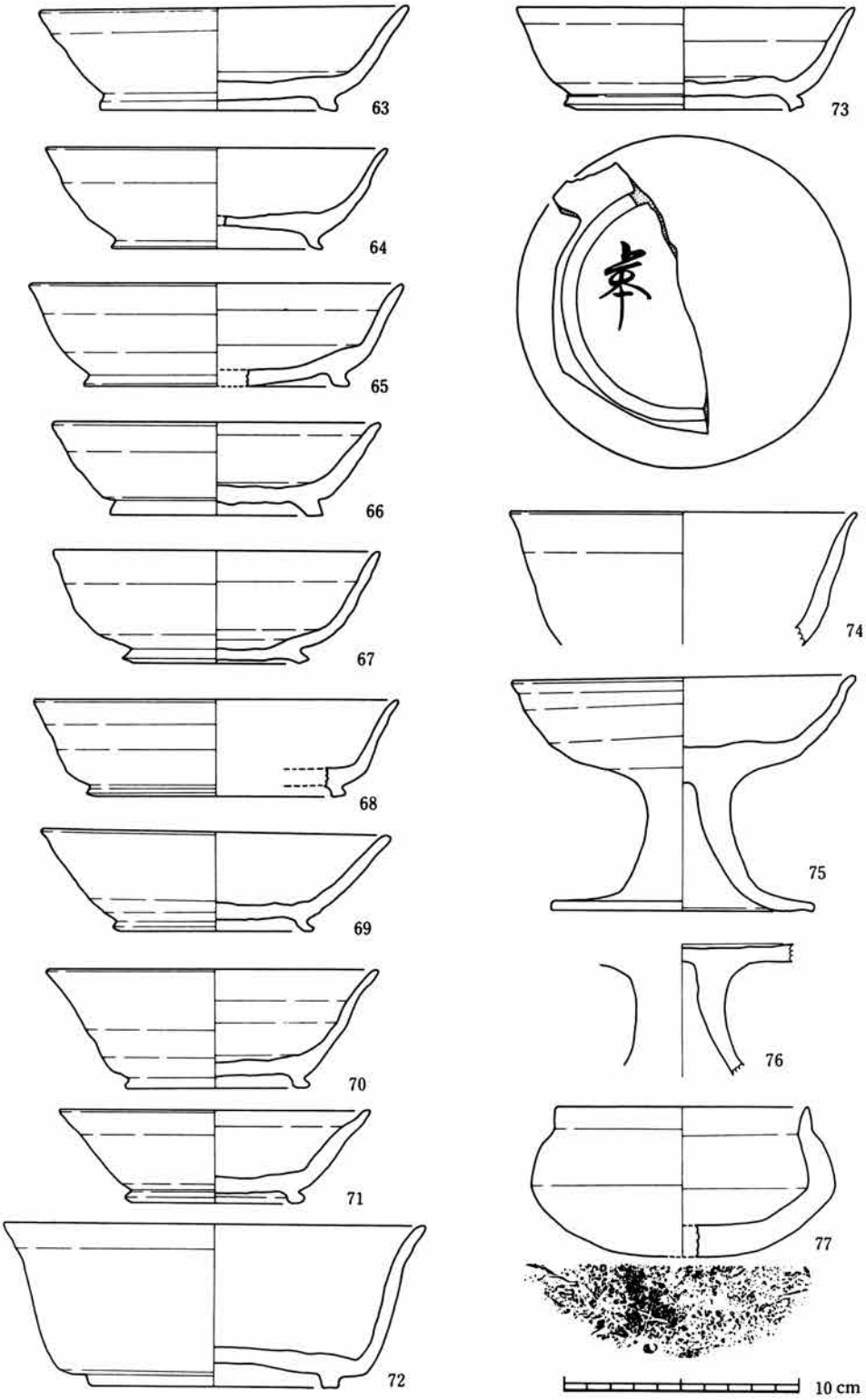
第７図　今町Ａ遺跡出土須恵器（２）



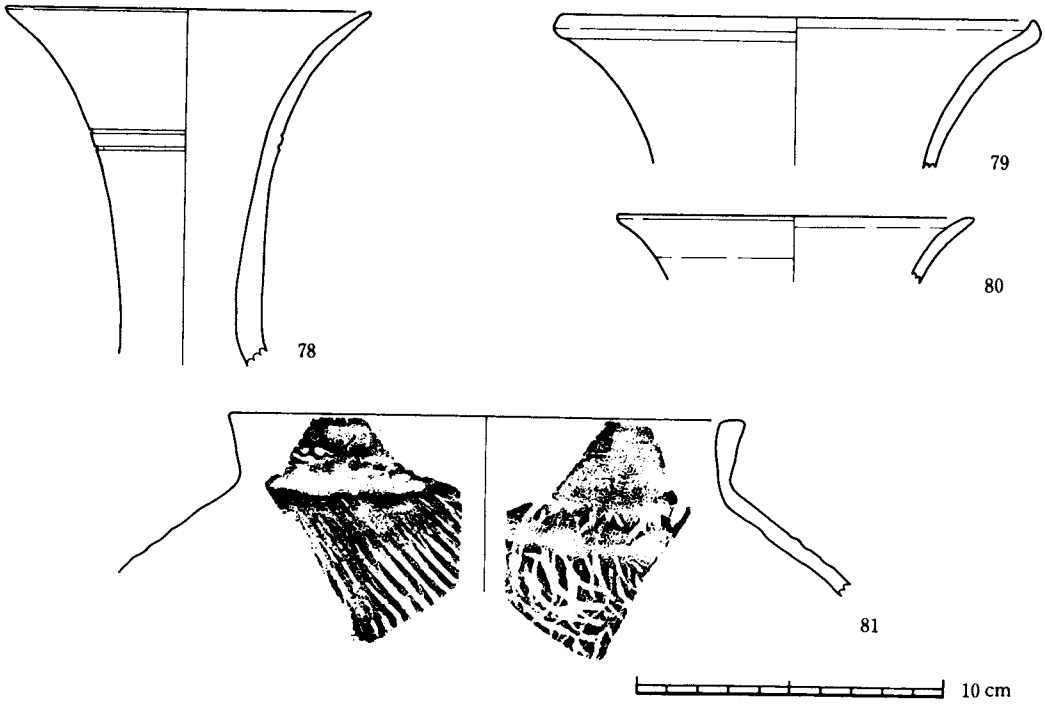
第８図　今町Ａ遺跡出土須恵器（３）



第９図　今町Ａ遺跡出土須恵器（４）



第10図　今町A遺跡出土須恵器（5）



第 11 図　今町A遺跡出土須恵器（10）

図 17 は、口径 12.9 cm、器高 3.1 cmを測るもので、成形の技法などについては、前者とほぼ同様である。しかし、平底をなすことや、器高もやや低く作り、器肉も厚くしている点で異る。体底部外面の各部に墨痕を認めることができる。図 19 は、口径 12.3 cm、器高 3.6 cmを測り、平底に近い底部から外傾し、口縁の端部に近くやや内彎気味として端部に至る。胎土には、長石粒をやや多く含有させている。体部外面には、重ね焼きの痕跡をとどめるが、当品が重ね焼きの最上段に置かれたことをも示していた。図 20 は、口径 13.0 cm、器高 3.7 cmを測る。底部はヘラによって切り離したあと、ハケ状具によるナデ調整を施すが、荒くヘラ切りの痕跡をそのままに残している。腰部は丸く作り、体部の上端近くでさらに外反させるものである。器肉は全体に薄く仕上げている。胎土には長石粒を多く含むが、焼成は良好である。これも口縁端部近くに重ね焼きの痕跡を残している。図 26・28・29・31・32・34・40 の 7 点も、ほぼ同巧の坏とみてよい。なお、40 の底部には、ヘラ先による刻文がみられる。

(4)　D類（口径 13～14 cm）坏（第 6 図 18、第 7 図 22・33・36～38、第 8 図 45・47）

図 18 は、口径 13.1 cm、器高 3.7 cmを測る。底部は平底に近いもので、ヘラ切りののちハケ状具を用いてのナデ調整としている。腰部から直線的に外傾させて口縁に至るものである。図 22 も同巧のものであるが、焼成不十分で生焼に近い。また、図 33・36・38・45・47 は、口縁端部の近くでさらに外反させるタイプである。図 45 の底部には、ヘラ描き刻文があり、体部外面にも墨書を認める。なお、図 47 の底部にも墨書がみられる。

図37は、口径13.4 cm、器高4.0 cmを測り、底部は尖り気味に作るが、ヘラ描き刻文が施される。なお、当坏では内外面ともに墨痕が著しい。

(5) E類（口径14 cm以上）坏（第7図21・30・35、第8図42）

図21は、口径14.2 cm、器高3.7 cmを測るもので、底部は平底に作り、体部は直線的に外傾させるものである。全体的にみて器壁は薄く、焼成不良と磨耗のため詳細に観察することはできない。図42もほぼ同様の器形をなすものとみられる。体部外面にヘラ描き刻文がみられる。図30・35は、底部を丸底に近い形とするが、腰部で内屈させ、さらに口縁部近くで外反させるタイプの坏である。いずれも焼成不十分で、胎土に多くの粗砂粒を含んでいる。

III）台付坏

出土総数は73点であったが、うち図示したのは26点である。これも前記の無台坏にならって口径の大きさにより、次の3類に分類した。口径11～14 cmのものをA類、14～15 cmのものをB類、15 cmを超えるものをC類とした。

(1) A類（口径11～14 cm）坏（第9図50～54・59、第10図66・67・70・71）

図50は、口径12.0 cm、器高4.4 cm、底径5.8 cmを測る。内屈する貼付け高台を有し、腰部から体部中位までは、ヘラ削りによって薄く仕上げている。中位から上方にかけて、やや外反させながら端部に至っている。内底面には、かなりの降灰釉がみられる。図51は、口径11.8 cm、器高3.8 cm、底径6.3 cmの上記坏と同様の小型品であるが、外側に張り出すタイプの高台を付し、器肉も厚い。

図54・59・66のように、無高台の坏身と対応して、腰部から直線的に外傾するタイプと、図67・70・71の如く、体部の約⅓上位で外反するタイプの2種が存在する。坏部の作り方は、II）無高台坏の項で述べたと同様であるが、前者の高台は角状に近い貼高台としている。一方、後者では、外側へ嘴状に張り出すタイプのものが多い。また、前者では概して器肉が厚く、ずんぐりした感じを与えるのに対して、後者では、腰部へのヘラ削り手法の多用などもあって、器肉は薄く、一般にシャープな印象を与える（図70は、腰部のヘラ削りのため稜埡的である）。

(2) B類（口径14～15 cm）坏（第9図53・56_{-1}・56_{-2}・58・60・61、第10図64・69・73）

図53は、口径14.4 cm、器高4.1 cm、底径7.7 cmを測る。底内面の凹む高台を貼り付け、腰部まで丁寧なヘラ削りとし、腰部からは丸味をもって外傾させる。体上位でさらに外反させて口縁に至るものである。その他の部分はすべてナデ調整とし、器肉は非常に薄く仕上げている。なお、胎土は良く精選されており、焼成も良好で黒灰色を呈する。図56_{-1}（口径14.7 cm・器高4.3 cm、底径8.4 cm）と56_{-2}（口径14.9 cm・器高4.5 cm・底径9.4 cm）は、いずれもやや大振りの坏であり、高台の造りに差異を認め得るものの、器形・調整法ともに共通するところがある。胎土・焼成もともに良好である。図61・64も同様で、体部上位で外反させるタイプであるが、器肉もやや厚く、前者に比してシャープさに欠けている。図60・69・73は、腰部から直線的に外傾して、口縁端部に至るタイプであり、そ

れぞれ、口径 15.0・14.2 cm、器高 4.5・4.2・4.3 cm、底径 9.6・7.8・9.0 cmを測る。図 73 の底部外面には墨書が認められる。

(3) C類（口径 15 cm以上）坏（第 9 図 55・57・62、第 10 図 63・65・68・72）

図 57 は、口径 15.4 cm、器高 3.9 cm、底径 9.8 cmを測り、体部の上位で外反させるタイプのものであるが、B類坏よりは外反率が低い。図 62・65・68 も同巧の坏であるが、全般的にこの類では器肉を厚く作り、どっしりした感じを与える。図 55 は、口径 55.5 cm、器高 4.1 cm、口径 15.5 cm、器高 4.3 cm、底径 10.0 cmを測るが、底外面に漆の付着が認められる。図 72 は、口径 17.8 cm、器高 7.0 cm、底径 9.8 cmを測る大型の坏で、この種のものとして図化可能な資料は、本例 1 点のみであった。底面を水平に作る貼り高台を有し、1.0～1.2 cm程度横へ張り出し、ほぼ器体の⅓上位まで直立させ、その部分から外反させながら口縁端部に至るものである。底部のほかは、すべてナデ調整としているが、底内面では使用のため磨耗している。図 74 も、同様に器高を高く作った台付坏となろう。

IV）高　坏（第 10 図 75・76）

4 点の出土をみているが、全形を知りうるものは、図 75 の 1 点にしか過ぎない。坏部径 19.4 cm、器高 9.9 cm、脚底径 11.2 cmを測る。坏部と脚部の接合部分のうち、坏底部の方にヘラ削りの痕跡をとどめているが、他はすべてナデ調整を施している。胎土に多量の砂礫を含むが、焼成は良好で黒灰色を呈している。

V）短頸小壺（第 10 図 77）

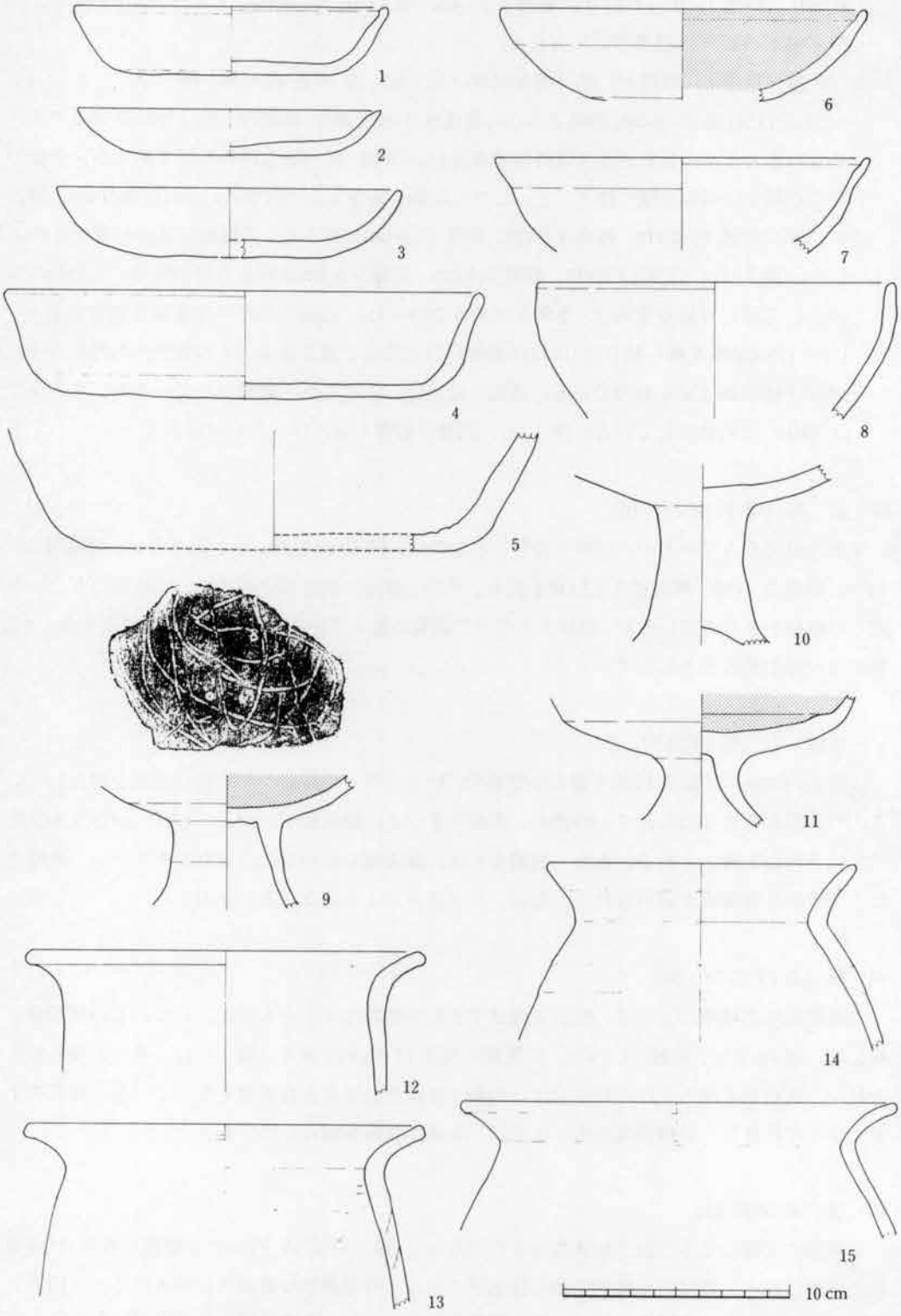
口径 10.6 cm、器高 6.4 cmを測る小型壺で、胎土に多くの長石などの粗い砂粒を混入している。口縁部から肩部にかけての外面と、内面のすべてに降灰釉がかかっており、かなりの高温で焼成されたと考えられる。成形・調整などは、降灰釉のため十分に観察できないが、底部では、ヘラ削りと擦痕が認められた。なお、ヘラ描きによる刻文「X」がある。

VI）瓶（第 11 図 78～80）

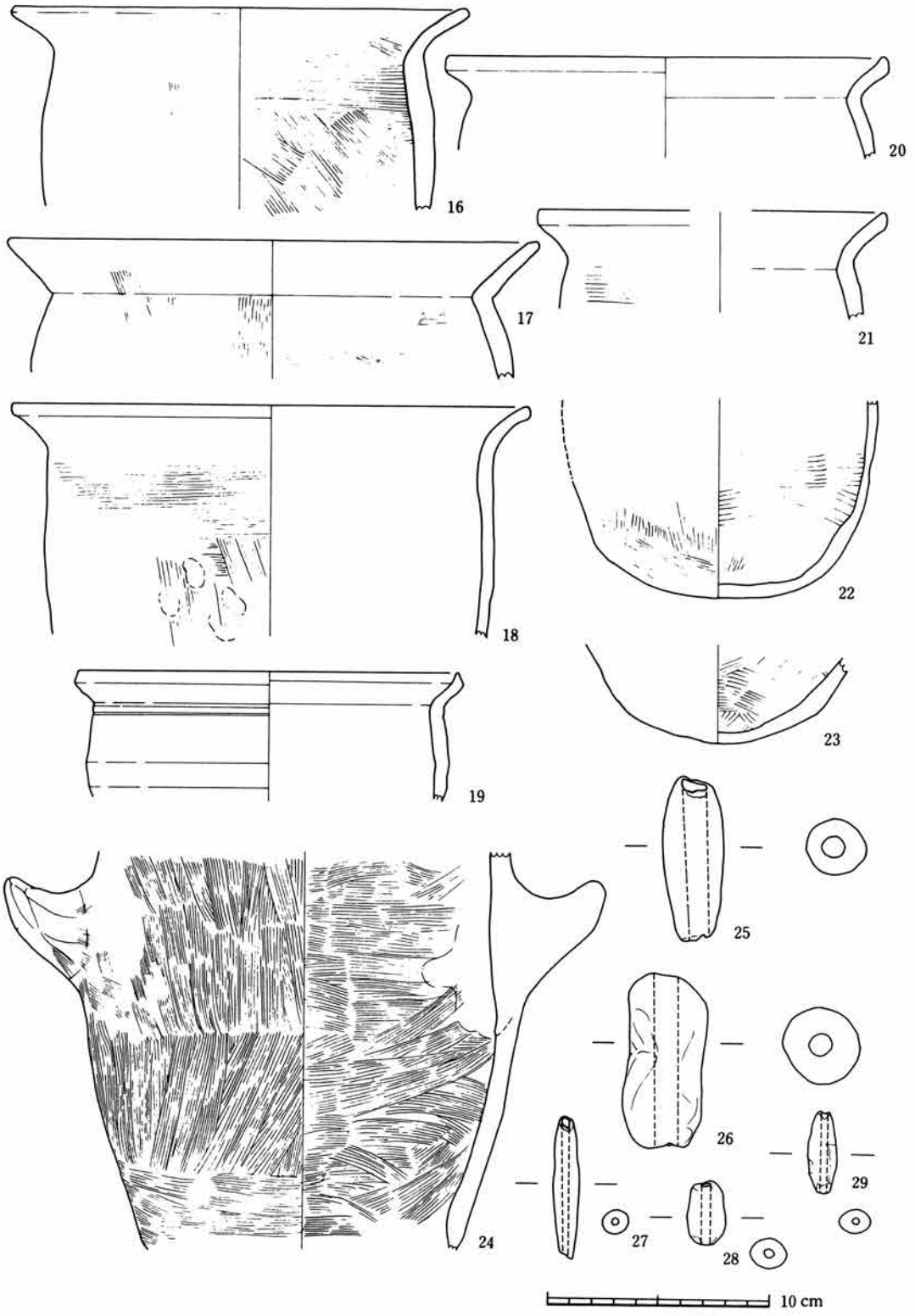
口縁部破片の観察によって、瓶形と確認できた個体数は 4 点であった。いずれも口頸部分の断片で、図 78 では、口径 11.9 cm、口頸部の高さ 11.7 cmを測る。胎土には、多くの長石粒を含むが、灰白色に焼き上げられており、内面では緑色を呈する自然釉を生じている。筒部の上半でゆるく外反し、口縁端部を丸く仕上げ、2 条の波線を周らしている。

VII）甕（第 11 図 81）

口縁部片で確認できた出土個体数は 5 点であった。復元口径 16.8 cmの小型甕であり、口縁端部を水平に作り、器壁も全体的に薄く仕上げている。外面調整は条線状の叩きにより、内面では同心円状の叩き目を残す。胎土は良く精選されているが、焼成不良のため色調は灰白色をなしている。



第12図　今町A遺跡出土土師器（1）



第13図　今町A遺跡出土土師器（2）

C　土　師　器

I）坏（第12図1～8）

図1は、口径13.5cm、器高3.0cmを測り、口縁端部の内側で肥厚させるタイプの坏である。内外面に赤色顔料をもって塗彩したとみられる痕跡が認められる。図2・3は、浅い皿形を呈するものである。図4は、口径20.7cm、器高4.8cmを測る大型品で、盤に近い器形となろう。内外面ともヘラ磨き調整のあと、全面に赤色顔料を塗布している。図5も同巧のものである。図6は、内面黒色でよく研磨されたものであるが、高坏の坏部となる可能性も高い。図8は、いわゆる鉄鉢形に近い器形をなし、口径15.5cm、器高は6cm以上のものとなろう。外面に塗彩の痕跡をとどめている。

II）高　坏（第12図9～11）

全形を知り得るものはない。図9・11は、内面黒色の土器であるが、図9にはヘラ先によるいわゆる暗文が施されている。図10も内面黒色土器であった可能性がある。

III）甕（第12・13図12～23）

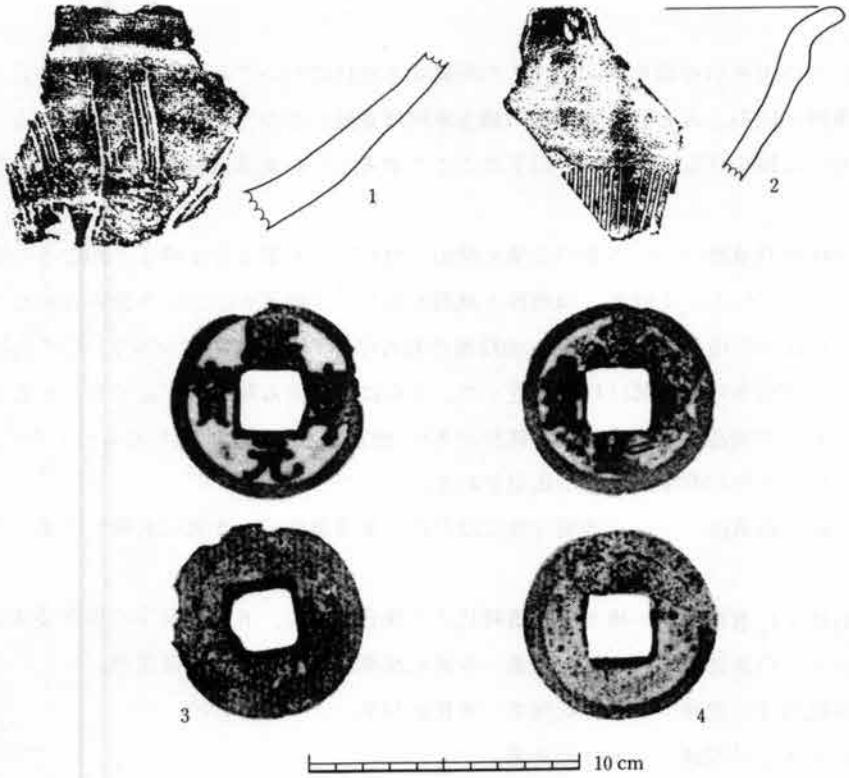
いずれも〝く〟の字口縁をなすもので、胴径が口径を大きく超えないタイプと考えられる。図13・16・18は、頸部に5～7条を単位とする粗いハケ調整が認められる。いずれも口縁端面は、水平に近い形をなす。図18には内外面ともに赤色顔料で塗彩した痕跡をとどめている。図22・23の底部にも、胴部で施されたと同様のハケを用い、5～6条単位の粗いナデ調整痕が明瞭に残されている。内外面ともにスス（炭素粒）の付着が著しい。

IV）甑（第13図24）

胴部のみの断片であるが、最大胴径19.8cmを測る。内外面ともに、細かいハケ状具による調整痕がみられる。内面では横位に、外面では縦位にかきあげている。把手は棒状に近いずんぐりしたタイプである。なお、いわゆる土製カマドとなる可能性を残しているが、ここでは、甑としておいた。

5）**中・近世の陶磁片**　本遺跡の耕土層を中心に、中・近世に降る陶磁器片約20点を採集している（第14図1・2）。図1は粗いおろし目を施した珠洲焼鉢であり、鎌倉時代に属すと考えられる。なお、採集品に同時期とみられる青磁片2点があった。図2は、近世（江戸時代）に降るスリ鉢口縁部断片で、赤褐色を呈し堅く焼かれているが、産出地は特定できない。なお、他にも十数点の近世陶磁器があった。

6）**土　錘**　土師質の土錘4点が出土している（第13図25～29）。図25は長さ7.2cm、最大径2.5cm。図26は7.7cm×3.6cm。図27は6.6cm×1.2cm。図28は2.9cm×1.7cm。図29は3.7cm×1.2cmをそれぞれ測る。土錘を一般に考えられているように漁網用沈子とみて、当



第14図　今町A遺跡出土の中・近世遺物

遺跡から網漁想定水域までの距離を挙げると、内灘海岸約7km、河北潟畔約2.5km、森本川約0.7kmとなる。おそらく、今日でもフナ・アマサギ・ボラ・ハゼなどの漁が行われている河北潟が、主たる漁場だったと想定している。

〔注〕一出土遺物のうち出土層位等につき明かなものは次の通りである（数字は図版番号）。

① 須恵器　溝状遺構覆土中出土――1
　包含層最下層出土――6・17・18・23・36・37・45・56_{-1}・56_{-2}・62・71・76
　溝状遺構充土中出土――7・74
　溝状遺構底部出土――2・5・29・42・54・61・68
② 土師器　包含層最下層出土――16・22・24
　溝状遺構底部出土――1・4・11
③ 土　錘　包含層最下層出土――26
　溝状遺構充土中出土――28

五　出土土器の年代について

今回の発掘調査で採集された土器は、かなりの量にのぼるが、うち須恵器の占める割合が高い。須恵器の器形による比率は、蓋32%（97点）、坏63%（189点）、甕1.7%（5点）、高坏・瓶各1.3%（各4点）、小型短頸壺0.3%（1点）であり、合計300点のうち蓋・坏で95%を占めている。蓋のほとんどは坏とセットで使用されるから、これを除いて考えても93%が供膳用の食器類で占

められることになる。一般集落における食器類の使用量・消耗量が著しく多かったことを物語っている。

さて、これらの出土須恵器を中心に、その所属する年代について若干の考察をしておきたい。しかし、本遺跡と同期とみられる集落跡の調査事例は意外に少なく、ここで参照できるデーターも断片的なものに頼らざるを得ない。以下にここで参考とした集落遺跡と須恵器窯跡を列挙しておく。

1）加賀市保賀B遺跡――3基の土壙を検出したが、うち第1号土壙よりかなりの遺物が出土している。土師器・須恵器・鉄器があり、土師器が圧倒的多数を占めた。須恵器坏は、口径14cm、器高4cm程度の有台坏があり、台底面が凹み、やや内屈するタイプが多い。体部は口縁部近くで、さらに外反する類で、ずんぐりした感じを与える。土師器では、甕・塊・鉢形があり、塗彩土器や暗文を施したものもある。年代的には8世紀前葉～中葉に比定される。

2）加賀市篠原新遺跡――宮地廃寺跡にほど近い集落遺跡で、8世紀前葉～中葉に比定される。

3）鹿島町徳前C遺跡――縄文・古墳時代との複合遺跡で、8世紀前半の集落遺構を検出。

4）松任市上二口遺跡――7世紀後葉～8世紀後葉に比定できる集落遺跡。

5）鳥屋町深沢4号窯跡――7世紀後半～8世紀初葉。

6）鳥屋町春木3号窯跡――8世紀前葉。

7）羽咋市柳田タンワリ1号窯――7世紀中葉～同後半。

8）押水町紺屋町1号窯跡――坏蓋に身受けの返しを有するものと、無いものが共存する。7世紀後葉に比定される。

9）高松町野寺1号窯跡――坏蓋の特徴や年代は、紺屋町1号窯と共通する。

10）金沢市浅川1号窯跡――8世紀中葉。

11）辰口町湯屋窯跡――7世紀後半。

12）辰口町莇生城山奥窯跡――7世紀後半～8世紀初葉。

13）辰口町来丸サクラマチ窯跡――8世紀前葉～同中葉。

14）小松市箱宮5号窯跡――8世紀後葉。

さて、本遺跡出土の坏蓋で、身受けの返しを有するタイプは、口径14cm前後のものが多い。この種のものは、羽咋市タンワリ1号窯に後続するとみられる鳥屋町深沢4号窯出土品に近似するものと考えられる。また、坏身では、口径10cm前後のもの（第6図15）と、復元口径9.0～9.3cm程度の小型品は、底部で再調整を施したものと、未調整のままのものとが混在するが、いずれもやや器高を高く作っている。いずれも腰部近くでヘラ削りを施し、口縁端に重ね焼きの痕跡を残すなどの特徴をもっている。この種の坏は、昭和56年に灰原部分の発掘調査（原因　砂防ダム建設）を行ったタンワリ1号窯跡での出土品に、類品を見出すとができる。

一方、口径12.0cm～14.0cmの範囲内にある坏身（台付坏を含む）には、体部が直線的に外傾するタイプと、体位でさらに外反するものとの2種が存在する。これらの坏類は、鳥屋町春木3

号窯跡や鹿島町徳前C遺跡の出土品に近似している。また、台付坏では、第9図50・52・53・56や第10図70のように、極端なほどに腰部で張りをもたせ、外傾度が強く、しかも器肉を薄くし器高もやや高く作る一群は、成形・調整技法などからみて、春木3号窯式よりも古相を示すものと推定できる。また、第10図72で示した大型有台坏は、小松市箱宮5号窯跡出土品と近似するとみられる。しかし、本遺跡出土の大型有台坏は2点に過ぎず、これを過大視しての速断は慎みたい。

高坏については、坏部における形状と調整技法などからみて、春木3号窯式期に類品が挙げられる。第11図78は、台付長頸瓶の口頸部破片と考えられる。図示していないが、嘴状に鋭く内屈する高台が存在することから、この台付長頸瓶も春木3号窯跡出土中に類例を見出すことができる。

以上で述べたように、十分な参考資料に恵まれてはいないが、須恵器からみての本遺跡の所属年代は、次のように推定できる。すなわち、タンワリ1号窯跡に後続する時期から、箱宮5号窯式にわたる期間と考えられ、その中心的盛期は春木3号窯式期にやや先行する頃とみている。年代的には、7世紀後葉から8世紀後葉の約1世紀間が当てられるが、8世紀前半期にその中心があったとみてよかろう。

土師器についても触れておこう。第12図2・3など比較的低い器高の坏や、第12図4・5のような内面黒土の土器、第12図9の暗文を有する高坏などは、徳前C遺跡の出土品中に類品がみられる。しかし、県下においては、土師器資料を豊富に得た調査事例は乏しく、現時点では十分な対比検討を行うことは困難である。ここでは、その多くが春木3号窯式期前後、すなわち、8世紀前半ごろに属すると想定しておきたい。

六　ま　と　め

今町A遺跡は、縄文時代晩期・奈良時代・鎌倉時代・江戸時代の四時代にもわたる集落跡であったが、その中心となる時期は奈良時代前半期であった。今回の発掘面積は必要最低限に限られたものであり、150 m²に満たぬ程度のものであった。したがって、検出した遺構も溝状遺構1条と若干の柱穴らしきものに過ぎず、この面から遺跡の性格や構造にまで言及することは、ほとんど不可能といえる。しかし、溝状遺構内を中心に約300個体にも達する須恵器をはじめ、各期の出土品を得ている。うち、奈良前半期を主とする須恵器類は、該期の資料とくに集落跡出土資料の乏しい中で、有易なデーターを提供したものといえよう。

8世紀代すなわち律令体制下にあっては、政策として行われた営農集団（集落）の新編成化と、竪穴住居から掘立柱建造物への変遷期にも当っている。この時期の集落構造を解明することは、考古学上でも大きな課題といえるが、さきにも触れたように今調査では検出遺構が乏しく、ほとんどこの問題に立ち入ることはできなかった。また、当遺跡の性格についても同様で、これを判断すべき材料は少ない。須恵器坏などに、「十」「真田」「迷」などと判読できるものを含めて、約十点程度の墨書土器があり、当集落に識字階層が居住した可能性の大きいことを物語っている。墨書土器の性格については、一様のものでなくその目的についても不明の部分がある。かって平

田天秋・東四柳史明氏によって、県下出土の墨書土器を集成されているが（1976年刊・金沢市戸水C遺跡調査概報）、これによれば、26遺跡が表示されており、いずれも平安時代に入ってからのものとされている。平田氏らの集成以降も、加賀市篠原遺跡・小松市高堂遺跡・同漆町遺跡・鹿島町徳前C遺跡・羽咋市寺家遺跡など出土例に増加をみているが、その多くも平安時代に降る事例であり、8世紀前半に遡上するケースはほとんどないといえる。このことは、今町A遺跡の墨書土器は県下では最古段階のものといえ、かなり重要な意味をもつと考えている。奈良時代前半に属する調査例が少ないことも、念頭に置くべきであるが、平安時代遺跡での墨書土器と一率に考えることも妥当でないと想われる。それは、集落跡などにおける識字階層が、奈良時代よりも平安時代に下って、その密度が多くなると想定してのことである。平安時代においても、墨書土器は金沢市藤江A・B遺跡や松任市横江遺跡などのように、官衙跡・廃寺跡・荘園関係遺跡等を推定させるような特殊遺跡での出土例が多いと考えられ、しばしば、石帯や木簡などを伴出することも共通して注目される。このことから、墨書土器の出土をもって、ただちに官衙跡などに結び付けることは正しくないが、一つの目安として重視しておく必要はあろうと考える。とくに、これが8世紀前半の古さをもつ場合は、やはり格別の配慮を要すとみている。ただし、律令期の営農集落にも一部で識字階層が居住し、特定の役割りを果していたことも考えられるから、ここで本遺跡を官衙跡など公的もしくはこれに準ずる特殊遺跡だと、速断するつもりはない。ただ、墨書土器が一般集落にまで普遍してみられる平安後期などに比して、8世紀代においては、より特殊な遺跡となし得る可能性が大きいと指摘しておきたい。

今町遺跡の北方、津幡川を挾んだ河北潟東畔平野を中心に、条里跡を検出されたのは吉岡康暢氏であり、津幡町の太田・潟端・中条・横浜・加賀爪・中須加・五反田・川尻・五月田を結ぶ範囲でみられるという。最近、五月田から領家に至る間で、奈良・平安時代に属する集落遺跡が数多く発見され（五月田・能瀬・領家・御川・指江遺跡など・仮称を含む）、条里と関係の深い班田集落が、この辺り一帯に分布するものと考えられる。森本や今町の付近では条里跡を確認していないが、地形・地勢の共通性からいえば、森本川下流域においても、かって条里が整えられていた可能性もあるとみている。今町A遺跡の実態は、なお、厚いベールで覆われ、不明瞭な部分が多いが、この辺りに営みをもった班田集落群の中で、特殊な役割をもった機関だったと想定することもできる。

参　照　文　献

(1) 石川県教育委員会編『石川県遺跡地図』（昭和55年）

(2) 橋本澄夫『金沢市今町A遺跡（金沢バイパス関係埋蔵文化財調査概報）』石川県教育委員会（昭和46年）

(3) 大聖寺高校郷土研究部「加賀市保賀B地点遺跡の調査」石川考古学研究会々誌12（昭和44年）

(4) 大聖寺高校郷土研究部「篠原新調査報告」郷土（昭和40年）

(5) 湯尻修平『鹿島町徳前C遺跡調査報告（I）』石川県教育委員会（53年）

(6) 浜岡賢太郎・嵯峨井亮・橋本澄夫・吉岡康暢「能登鳥屋古窯址群の調査（第一次）』石川考古学研究会々誌9（昭和40年）

(7) 福島正実・宮下栄仁・三辻利一『羽咋市柳田タンワリ1号窯跡』石川県立埋蔵文化財センター（昭和57年）
(8) 宮本哲郎『浅川第1号窯跡（灰原）調査報告』金沢市文化財紀要10（昭和51年）
(9) 高橋　裕『辰口町来丸サクラマチ古窯』石川県教育委員会（昭和50年）
(10) 大聖寺高校郷土研究部「南加賀古窯址群箱宮地区調査報告」郷土8・9（昭和46年）
(11) 平田天秋・東四柳史明『金沢市・戸水C遺跡発掘調査概報』石川県教育委員会（昭和51年）
(12) 四柳嘉章『金沢市藤江B遺跡』石川県教育委員会（昭和45年）
(13) 吉岡康暢「加賀における条里制をめぐる問題」北陸史学8（昭和34年）
(14) 吉岡康暢「津幡町の大むかし」津幡町史（昭和49年）
(15) 橋本澄夫「古代社会の内灘」内灘町史（昭和57年）

遺 跡 遠 景（南方より）

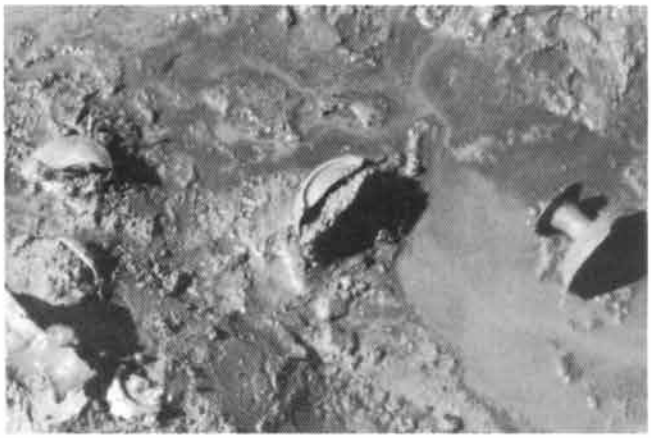
発掘風景（北方から）

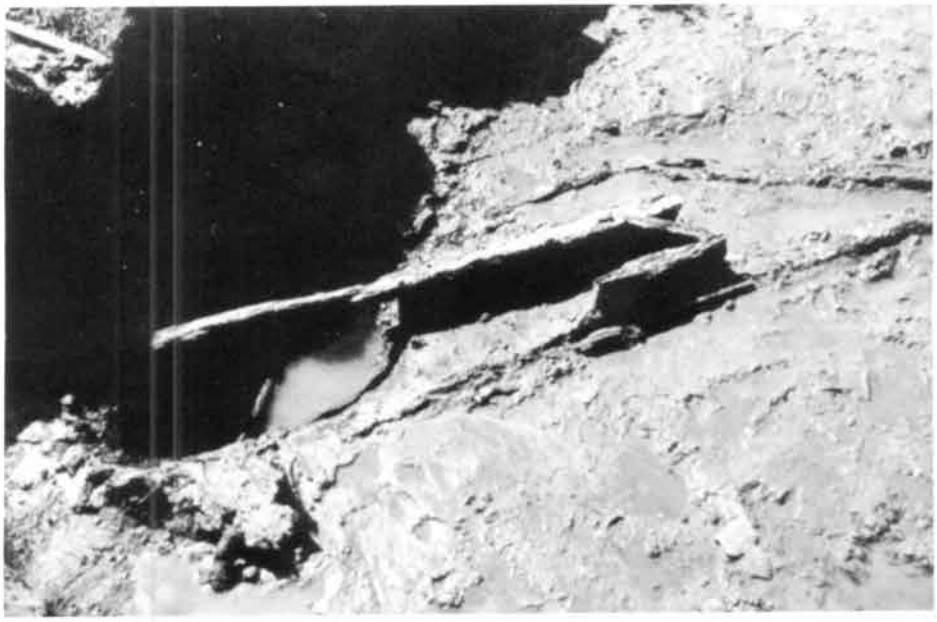
溝状遺構の発掘（南方より）

↑須恵器の出土状態

←溝状遺構の全景

図版III





↑土器類の出土状態

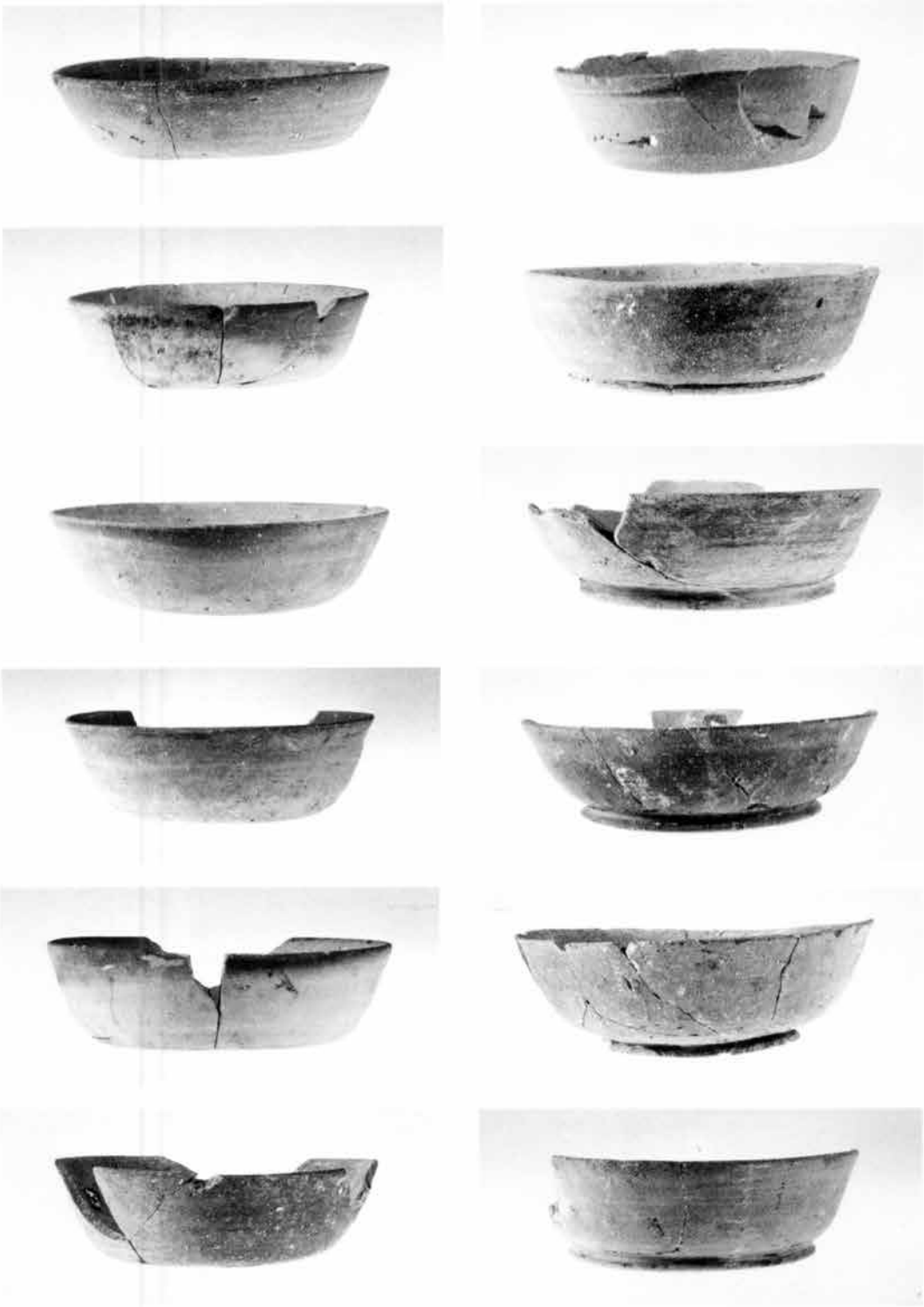
←横たわる建築材？
溝状遺構の底に

板材(?)・椀・曲物の出土状態（溝状遺構底部）

今町Ａ遺跡の現況（昭和57年3月・西方より望む）

須恵器（蓋・坏類）

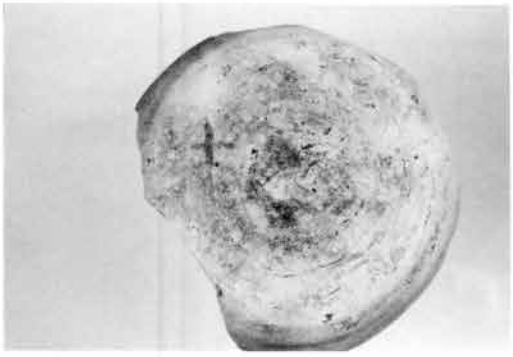
図版VI



須恵器（坏・高坏・瓶類）

須恵器（ヘラ描き刻文）

図版Ⅷ



墨　書　土　器

↑十　迸

↗真田

土錘↗

土師器（甕類）

土師器（上一甑、下一甕底部）

石川県金沢市今町A遺跡

金沢バイパス関係埋蔵文化財
発掘調査報告書

昭和57年3月20日　印刷
昭和57年3月31日　発行
発行　　石川県立埋蔵文化財センター

印刷所　　株式会社　橋　本　確　文　堂